

教 仁 名 聞

第 100 号
(発行日)

2019 年 1 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)
63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈聞名の会〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

念 仏

こうした気分
の良し悪しは仏
教では煩惱とし
て扱われている。

その風景の良し悪しはその
場限りで当てにならない。た
だただ列車に乗せられて進ん
でいるのであり、つくべきと
ころにつく。外の風景に関係
なく、目的地に進んでいるよ
うに、気分が良し悪しに関係
なく、南無阿弥陀仏の浄土行
きの列車に乗せられての一日
である。

相当寒がりの私は厳寒の朝、
起きる前から部屋を温めてか
ら着替える。家が古いから廊
下に出ると寒さが身にしみて
気分がやや落ち込む。仏間で
の朝の勤行をするために準備
をする足の下が冷たい。そ
うすると体全体が冷えて気分
が悪い。ふっと思い出してヒ
ートテックのソックスを取り
だして履き替える。すると急
に足がほんわか温かくなって、
気分が一度によくなる。

感じることは、気分の快不快
は縁によつて実に変わりやす
いということである。このよ
うな日常的な経験から、いか
に気分というものは縁次第で
変わるものか、を身にしみて
知らされる。

気分というものは、その日
その日の縁次第であつて、爽快
だからといって当てにしない
し、気分が悪いからといって
落ち込まないようにしたいも
のである。

「浄土行きの列車の中に汝
はいるのだ」と告げ知らせ
下さる阿弥陀様のお声が南無
阿弥陀仏。このお念仏こそ気
分の良し悪しをこえたまこと
のより処である。

寒い日にはお参りに出るのが
嫌だなあと気分になる
がいったん玄関を出てしま
うと気分が爽やかになる。
又、どうも身体の調子が今
ひとつ悪いのでおかしいな
と思つてお医者さんのところ
に行つて血液検査をしてみら
う。後日結果を聞きに行く。ど
んなだろうかと不安混じりで
気分が優れないが、先生から
「検査結果はとくに異常なし」と
聞くと、その途端気分が急に
明るくなる。

実体がないにもかかわらず、
日常生活はそういう気分や妄
念に振り回されやすい。
こうした気分や妄念を正信
偈では「雲霧」に喩えられて
いる。なるほど、雲霧はつか
んでも実体がないであろう。
しかもいかに雲や霧が厚くて
も、縁がくればどこへやらで、
青い空があらわされて雲や霧は
影も形もなくなる。

気分が不快のすがたはち
ようど列車に乗るとトンネル
を出たり入ったりするような
ものである。
こういうときは、気分の悪
いときもナムアミダブツ、気
分の良いときもナムアミダブ
ツでありたい。お念仏は浄土
行きの乗り物、トンネルを出
たり入ったりしていても列車
に乗せられていることに変わ
りはない。その都度の心の虚
実・明暗・快不快はトンネル
を出たり入ったりする時の窓
の外の風景のようなもの。

（了）

こういうささやかな経験で

実体がないにもかかわらず、
如何にそのつどの快不快の気
分に振り回されやすいかを考
えると、その時その時の気分
の良し悪しに落ち込んだり浮
かれたりしないように気をつ
けることが大事だと思う。

謹 賀 新 年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

平成三十一年元旦

- 土井紀明 中村穂積
- 土井眞由実 宮野勲
- 中川政二 吉田徳子

至心信樂欲生と

(和讃問答)

至心信樂欲生と

十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして

眞実報土の因とする

(大經和讃)

(現代語訳) 第十八願に、わが誓願の眞実を深く信じてわが国へ生まれるとおもえと、如来があらゆる衆生に喚びかけて勧められ、念仏往生の不思議な誓願をあらわして、この誓願を信ずる信心を眞実報土へ往生する因とせられる)

* * *

N 「この和讃は何についての和讃ですか」

D 「無量寿經に釈尊が説かれたアミダ如来(法蔵菩薩)の四十八通りの誓いの中で、その中心となる第十八願(因願)について詠われた和讃です。十八願そのものを和讃にされたのです」

N 「十八願(因願)はどういう願文ですか」

D 「設我得仏 十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念

若不生者不取正覺 唯除五逆 誹謗正法 (たとひわれ仏をえたらんに、十方衆生、至心信樂して、わがくに生まれんとおもて、乃至十念せん、もし生まれずば、正覺をとらじ、ただ五逆と正法を誹謗せんをのぞかん) です」

N 「この願文のお心を歌にされたのですね」

D 「ええそうです」

N 「では〈至心信樂欲生と十方諸有をすすめてぞ〉とは」

D 「まず至心とは、眞実心ということ、この十八願全体が阿弥陀仏の眞実心によって建てられ、成就されたものであることを示しています。だからこの誓願は眞実であるから間違ひなく一切衆生を助けることができるのお心です」

N 「なぜ間違ひなく衆生を助けることが出来るのですか」

D 「衆生には眞実清浄な心無く、それゆえに流転を重ねて浮かぶ瀬も無い者だと如来法蔵様はご覧になり、かわいそうである助けにはおかな

いと立ち上がられて一切衆生に代わって仏(眞実者)になる修行を眞実心にて為して下さり、それを成就して南無阿弥陀仏になられたのです。その全体が大悲の眞実そのもののお働きですから、一切衆生を助けたもう本願は眞実であり、一切衆生が仏になることに間違ひないことを至心と表されているのです」

N 「では〈信樂〉とは」

D 「この心はやはり如来法蔵様のお心で、この南無阿弥陀仏の誓願の力で一切衆生を助け得ることに一点の疑いもなきお心です」

N 「阿弥陀様は南無阿弥陀仏で衆生が救われることにつゆチリほども疑いが無いのですね」

D 「ええそうです」

N 「では〈欲生〉とは」

D 「これは願文では〈欲生我國〉です。〈我國〉は阿弥陀仏の浄土のことです。一切衆生を浄土に生まれさせてやりたい、救うてやりたい、仏にしたいとの本願の全体の願心を表されたものです」

N 「流転の衆生を救いたいという法蔵の願心が欲生我國の心(欲生心)なのですね」

D 「ええそうです。なおこの欲生のお心は觀無量寿經には

回向發願心の心でもあると先人は教えて下さっています」

N 「欲生我國は回向發願心という意味もあるのですね」

D 「ええ、一切衆生を浄土に生まれさせたいのお心は、生まれさせずにはおかないという強い願心であつて、その心は積極的に衆生に働きかけて下さる、それを回向發願心といひます」

N 「回向發願心とは」

D 「衆生を救いたいと發願し、南無阿弥陀仏の救いを私たちに回向(与える)したもうお心であり働きます。それが欲生我國の思し召しです」

N 「どのように私たちに回向されるのでしょうか」

D 「南無阿弥陀仏を衆生に称えさせて聞かせて下さるので、そして私たちが南無阿弥陀仏を聞くと云うことは〈欲生我國〉と聞くことです。〈我國に生まれさせたい〉(生まれさせる)〈生まれることが出来るから安心してくれよ〉の大悲心と聞かされるのです」

N 「そうすると私たちが南無阿弥陀仏を聞くと云うことは、〈欲生我國〉を聞く事になるのですね」

D 「ええそうです。〈我が國に生まれさせる〉との仰せ(勅命)としてお聞かせいただく

のです」

N 「なぜ〈浄土に生まれさせる〉(浄土に生まれることが出来る)と聞くことができるのですか」

D 「私たちが浄土に生まれるのは阿弥陀仏の誓願が成就して、十八願の通りに働いて下さっているから、私たちが十八願を聞くと云うことは、私たちが丸だすけにして下さる本願が成就していることを聞くことになるのです」

N 「では〈至心信樂欲生と〉の思し召しを端的にいうとどうなるのでしょうか」

D 「汝に与える南無阿弥陀仏で、間違ひなく(至心)疑いなく(信樂)浄土に生まれさせる(欲生我國)から安心してくれよ、との大悲のお心であります」

N 「〈十方諸有をすすめてぞ〉とは」

D 「十八願の十方衆生をここでは十方諸有と云われています。十方とは四方八方の衆生、そして上は天上界から下は地獄の衆生まで、一切衆生のことです。ことに諸有といわれるのは諸々の迷いの境涯をめぐって来た存在(有)が私たちであることを示されるのです」

N 「(すすめてぞ)とは」

D 「これは次の不思議の誓願を私たちに(至心信樂欲生)で(どうかこの誓願をまこと

信じて浄土に生まれてくれよ)と如来法蔵様が私たちにお勧め下さる、ということですよ」

N 「(汝をソノママなりで助けるから、助かってくれよ)のやるせないお心なのですね」

D 「ええ、そうです」

N 「阿弥陀仏が私たちに頭を下げて、この南無阿弥陀仏で助けさせてくれよとまでお勧めいただいたかなくては私たちは受け取ろうとしないのですね」

D 「ええそうですね」

N 「では次の(不思議の誓願あらわして)の不思議の誓願とは」

D 「これは十八願の(乃至十念・若不生者・不取正覚)(乃至十念せん、もしむまれずば、正覚をとらじ)のお誓いです。十念に至るに及ぶまで、もし生まれずば正覚を取らない、という誓約です」

N 「この誓いは何を表そうとされるのですか」

D 「如来法蔵様は一切衆生の本質を見られ、衆生には真実清浄な心が無いと徹見され、それゆえ迷いの世界を流転し続けていくしかない衆生を憐

れみたまひ、一切衆生をまる

まる引き受けて罪を除き浄土に生まれさせて仏にしたい、助けたいと願われ、修行して、全面的に阿弥陀仏の力だけで衆生を救う仏様になられた、それが南無阿弥陀仏です。そこで衆生のありべのまま丸

だすけにしたもう大悲のお働きを私たちに告げ知らせようとして(乃至十念せん、もしむまれずば、正覚をとらじ)との誓いに表して下さったのです」

N 「(乃至十念)というのは」

D 「たった十声なりとも口に称名念仏するものを、という

思し召しです。十声でも一声でも、それ以上でも、お念仏を称える数に限定のない思し召しです。とりつめていえば、一声称えるばかりで、という思し召しです。(一声でも我が名を称えるばかりで、もし浄土に生まれまいようなら、この法蔵菩薩は仏(正覚)に

ならない、と誓われたのです」

N 「一声なりとも念仏申すものを浄土に生まれさせる、との誓いに大いなる大慈大悲のお心が表されているのですね」

D 「そうなんです。如来法蔵様は私たちに何も条件をつけず、私たちをまるまる引き受けたまひ、助けたもう極まり

なき大慈大悲のお心です」

N 「真宗では(そのままなりのお助け)とよく聞きますが、この思し召しなのですね」

D 「ええそうです。(もし生まれずば正覚を取らじ)で、この願を誓った如来法蔵様は衆生が浄土に生まれまいようならご自身が正覚(仏)にならないとまで誓われたのです。そして今現にこの誓いが成就して阿弥陀仏になっておられます」

N 「なぜ(我が名を称えるばかりで助ける)という誓いは不思議の誓願といわれるのですか」

D 「この誓いは私たちの資質

や行為の善し悪し、修行の有無や教養のあるなし、社会的条件の上下など一切問われること無く、煩惱の凡夫のまま

で仏にするという、全く普通の論理や道理を超えた誓いであって、私たちの思案や了解では納得できる話ではなく、

まったく不可思議なお助けだからです。普通の了解では、人は厳しい修行を重ね、自分を仏になるべく自己を改革していく道こそ仏になるのだというのが人間の理屈に合う考えです」

N 「こういう人間の思案や理

屈ではどうも納得のできない不思議なお助けだ、ということですね」

D 「ええですから、この誓願は人間の知性で分かる話ではない、ただ不思議とそのま

ま聞き受けるほかには無いのだ、とのいわれでもあるのです」

N 「ではどうして不思議な誓願を宗祖や法然聖人はそのま

ま聞いたかされたのでしょうか」

D 「それはあまりにも有難い思し召しだからです。大慈大悲のあふれた思し召しだから、理屈離れて(ああ有難い)と

いただかれたのです。しかも不思議なことにその時阿弥陀仏との生きた出遇いが成就したのです」

N 「なぜ理屈離れて(ああ有難い)と受け取られたのでしょうか」

D 「それはもうご自分にとつて外に道がないことが身にしみていたからです。たとえば、

溺れかかっている時に、(この手に掴まれよ)と手を差し出して下さるお方があれば、その方がどんな方か、どうして手を差し出して下さるのかなどと詮索するゆとりはありません。(ありがとう)とそのま

を聞くと、もはや外に道が無い者にとつてはそのまま(ナムアミダブツ、ナムアミダブツ)と念仏するほかに、そのまま(ああこのまま)なりで引き受けて下さることよ)と喜ばざるをえないのです」

N 「阿弥陀仏の誓願の前には不思議といたたくばかりなの

ですね。では次に(真実報土の因とする)とは」

D 「真実報土というのは真実なる浄土ということで大いな

るサトリを開く涅槃の境界です。この浄土に生まれる正しきただ一つの因は誓願を信じる信心、そのことを真実報土の因といわれるのです」

N 「信心が報土の因であることは分かりますが、それが至心信樂欲生と不思議の誓願とどのような関係があるのですか」

D 「不思議な誓願である(我が名を称えるばかりで助ける)の誓いを(どうかほんとと信じて助かってくれよ)とお

すすめが至心信樂欲生です。信ぜよは(すべて引き受けるから安心してくれよ)のお心

でありませぬ。この十八願全体が大慈悲のやるせない願心であり、これが私に届いて信心になつて下さるのです」

住職雑感

お便り

N 「その信心が真実報土の因となるのですね」

D 「ええそうです。私たちに、どうかまことと信じて助かってくれよとお勧め下さるへ不思議の誓願あらわして、この誓願を聞かせて下さる。この誓願の大慈大悲のお心が信心として私に届いて真実報土の因となつて下さるのです」

N 「そうすると、私たちに念仏往生の願を建て、この願を信じさせたい、信じさせずにはおかない、という大悲の願心が十八願の全体になつていくのですね」

D 「本願の念仏も、それを信じる信心も衆生に与えて救おうと誓願されたのが十八願です」

N 「そして念仏を信じる信心が浄土に生まれる唯一つの正因なのです」

D 「ええ、それは正信偈にも〈至心信樂願為因〉(至心信樂の願を因と為す)

と言われていますが、至心信樂の願とは十八願のことで、私たちに念仏往生の願を信じる信心を浄土往生の因として与えて一切衆生を救おうとの大悲の願であると示して下さいます」

(了)

年末ミャンマーに旅をする。仏教寺院に参拝し、マンダレー・ザガイン・ヤンゴンにある日本人墓地にお参り。

仏教に対する民衆の信仰の厚さは驚くほどである。ミャンマー(旧ビルマ)では第二次世界大戦で十八万人の日本兵が犠牲になった。それだけでなく、現地のミャンマー人に多大の人的物的損害を与えたことはいまでもない。

にもかかわらず、ミャンマー人が日本人に対して友好的な感情をもっている人が多いことを嬉しく感じた。ザガインはミャンマー仏教の修行の中心地で、修行中心の寺が静かな林の中に林立していて非常に感じのよいところであった。ザガインヒルという丘の上に美しい寺院があり、そこに日本人が建てたパゴダ(仏塔)がある。そのパゴダには今年の大戦で亡くなられた旧日本兵の名前が数多く刻まれている。ヤンゴンの日本人墓地の入り口に、正月だからであろうか、新しい大きなしめ縄がかけられていた。私にはやや違和感があった。日本を遠く離れたはるかなこの地でなんと多くの若き青年が無残にいのちを落としたことであろうか。

(了)



お便り

(T・K様からのお便り)

今回、座談会の中で、気になったことは、「繰り返し返す」「憶念」ということであります。先生は反復、という言葉も仰つて下さいました。何事にも通じると思うのですが、本当の達人といわれる人は基本を徹底された方であり、だからこそ、それを超えるもの、成果を生み出していくのだと思います。また、愛樂仏法味禅三昧為食という言葉もありますように、この南無阿弥陀佛は全く味わいつくせぬものでもあります。称えやすく、たちやすい名号を案じいだしてくださったことを深く感謝致します。

あまり意識したことはなかったのですが、やはり、今、自分が所属している世界、国は娑婆だなあと思うのであります。堪忍の土とも言われるように、本当に思い通りにならないし、互いに仲良く、共存したいと思っっているはずなのに、有益であるとか、動きが鈍いとか、そういう心を作

つてしまい、閉じよう、閉じようとして僕自身はしてしまっています。

しかし、わが名を称えよ、タスクルの仰せに帰るならば、不思議なことですが、「ああ、いしかわらつぶてのような、誰からも見向きもされず、誰からも大切にされず、相手を傷つけること、奪うことがやめる力のない自分をいだきとつて放してくださらぬ大いなる大悲が待っていることよ」という念佛にかえして下さいます。

海の波は絶えず起り、寄せては返して、寄せては返してとなるように、いつの間にかわが計らいは本願海の念佛の波によつて遠くへさらわれて、忘れ果ててしまいます。先生がいつも仰つてくださいます。「われ、汝とともに居る。必ず往生させる」の仰せが今、口に称え、耳に聞こえてくださるところの南無阿弥陀佛であります。ここまでの大悲であったとは存じ上げませんでした。常に喚びかけ、いだきと

り、大悲をかけて、憶念してください。その如来の本願、誓願によつて、われらは平等に必ず往生せしめられるのであります。

浄土真宗、阿弥陀佛の本願の教えはまことに不可思議であり、碍りなく、時も場所も人も選ばず、きらわず、平等に摂取してください。今、ここに存在するタスクラヌ身に、必ず往生させずはおかぬ、わが国に生まれさせるの勅命となつてまで、至り届いてくださいます。

今となつては、ただ先生方が教えて下さる南無阿弥陀佛の仰せに順い、ただ念佛を申し、聞かせて頂くばかりで十分であります。

合掌

〈遠方法話予定〉

○二月十九日。名古屋。高畑開法会館。午前十時より法話・座談

○三月二日。福井別院。二組推進員開法会

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

〈変更のお知らせ〉

三月六日(聞名の会)を三月八日に

変更致します。時刻は同じく午後七時から。